足立区長賞

「私の『好き』を支えてくれる税金」

足立区立 第十一中学校
三年　松村　芽衣

私はこれまで、税金について深く考えたことがありませんでした。税金は「大人が払うもの」というイメージが強く、未成年の自分には遠い存在だと思っていたからです。

そんな私の考えが変わったきっかけは、所属する吹奏楽部の顧問の先生に言われた一言でした。一年生の頃、私は不注意で楽器を壊してしまったことがあります。その時、当時の顧問の先生に「この楽器は区が税金で買ってくれたものだから大事に使って」と怒られてしまいました。よく見てみると、楽器のケースには「足立区備品」というシールが貼られていました。誰かが働いて納めた税金によって用意された楽器だと思うと、それまでと同じ楽器なのに前よりもなんだか大切なものに思えてきて、それ以来楽器を吹くときには前よりも丁寧に扱うようになりました。

税金について調べてみると、楽器の他に消防署や図書館など、身近な施設でも税金が使われていることが分かりました。毎日通っている学校もその一つです。楽器の練習ができる音楽室があり、そこで仲間と共に部活に取り組めるのも当たり前ではないことをその時感じました。

そして今では三年生になり、最後のコンクールが近づいていました。一、二年生の頃の結果は全て銀賞。最後は金賞をとって終わりたい！と部員全員が必死になって練習していました。その中

で私達が練習場所の一つとして利用していたのが、近所にある西新井文化ホールです。このホールも、区の税金によって建てられています。普段の音楽室とは違う広い空間で演奏すると、いつもなら気にならない音のズレや自分の音の響き方など、新たに気づけたことが沢山ありました。その経験を本番にも活かすことができ、私たちは初めて金賞を受賞することができました。

振り返ってみると、私がここまで部活動を続けられたのは先生や仲間たちが支えてくれただけでなく、楽器や練習する場所など、日常の中にある税金のおかげだと分かりました。税金がなければしっかりとした練習ができずに、金賞も受賞できなかったかもしれません。

あのとき使っていた西新井文化ホールは、もうすぐ大規模改修工事が入り使えなくなります。再び使えるようになる頃には私も十八歳、大人になって税金を払う立場になっています。楽器があり、音楽室があり、ホールがある。これらのことが決して当たり前ではないということを頭に入れながらこれからも部活に取り組んでいきたいです。そしていつか誰かの「好き」を支えられる大人になりたいです。